

2012年8月20日 発行

市史だより

F u k u o k a

15

史的再発見マガジン
[シシダヨリ・フクオカ]

Spring/Summer 2012

TAKE FREE



特集

那珂

往来を見続ける街

連載コラム「歴・史・万・華・鏡」 ● 連載コラム「福岡市史への歩み」

部会だより（考古・古代・中世・近世・近現代・民俗）



昭和三十(一九五五)年に福岡市に編入されるまで、**麦野・東光寺・板付・諸岡・竹下・井相田**は筑紫郡那珂町に属していました。「那珂」は古代の那珂郡に遡る古い地名です。この旧那珂町一帯は、博多と太宰府市方面をつなぐ幹線道路や鉄道が通る交通の街でもあります。これは古くからそうであったようで、那珂は博多に向かう人々を見続けた街でした。今回は人々の往来をめぐる那珂の歴史を振り返ってみましょう。

● 弥生時代の都市計画？

この一帯は、九万年前の阿蘇大噴火の火砕流堆積物によって形成された台地です。この台地上には、弥生時代「奴国」の中心地である須玖遺跡群(春日市)があり、比恵・那珂遺跡群は同じ台地の北端にあたります。

さて、ここが生活の場となったのは、後期旧石器時代からですが、その後弥生時代が始まる前後に台地の縁辺での生活が始まるまで、人の営みは希薄だったようです。人の関与が増え始めるのは弥生時代中期で、中期の終わり(前一世紀頃)には建物や施設が爆発的に増加します。発掘調査では、住居のほかに、たくさんの

井戸や溝、大陸からもたらされた土器、ガラス勾玉や青銅器を造る道具なども見つかりました。また、溝には、「排水」用途以外に、土地利用を意識して造られた「区画溝」や「水路」、防御用の壕があったのです。計画的な土地利用の意識は、大陸の影響を色濃く受ける最先端の地ならではのようです。

弥生時代から古墳時代に移り変わる頃、台地の高所には、まっすぐに延びる二本の溝が現れます。その距離一・五キロメートル、溝と溝の間を幅五〜八メートルの何も無い空間が延びていました。これは、人が通ることを意識した「道路」であり、二本の溝はその側溝であるとの見方が有力です。道路沿いには、建物、円形や方形の小古墳、那珂八幡古墳が造られます。そこには、側溝を持つ道路を中心として配置された「計画性」があったのです。

● 大宰府と博多を結んだ道

律令にもとづく政治が目指されるようになると、政府は地方と都を結ぶ緊急連絡用の特別な道「**駅路**」を整備しました。駅路には駅家が置かれ、特に許可を受けた使者だけがそこで寝食の提供を受け、駅馬を乗り継ぐことができ

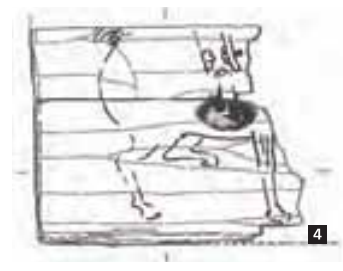
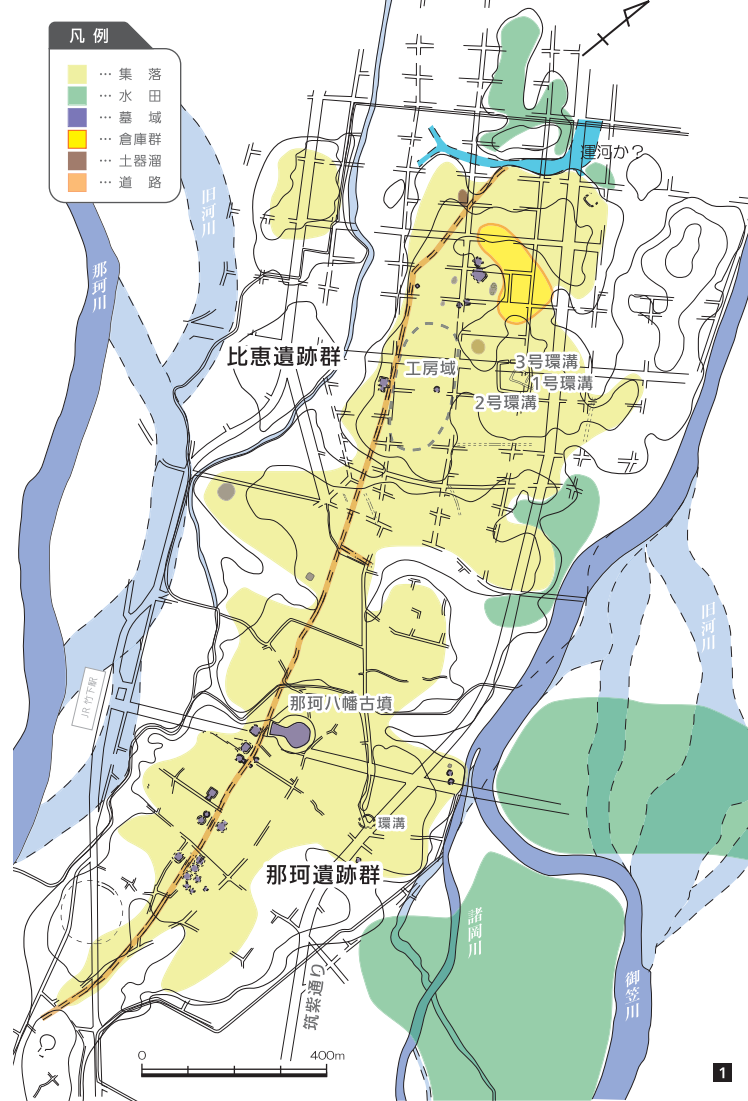
ました。このうち、大宰府を出て北に向かう駅路は、水城の東西の門を通って、それぞれ鴻臚館(西門ルート)と現在の博多辺り(東門ルート)を目指しました。現在、太宰府市と福岡市を結ぶ主要道に、**県道一・二号線(旧国道三号)**と**県道三・一号線(通称五号線・高宮通り)**がありますが、おおむねこれが古代の東門・西門ルートに沿っています。

那珂は東門ルート上に位置しており、発掘調査によって点々と駅路跡が見つかっています。なかでも注目されているのが高畑遺跡です。県道一・二号線と福岡都市高速道路環状線五号線が立体交差するこの一帯は、古代道路の痕跡として早くから知られていました。というのも、低い台地が南北に切り通されているのが、古い地形図や空中写真に見えるからです。発掘調査を行うと、やはり路面を叩きしめた基礎工事の跡が見つかりました。それだけではなく、たくさんの瓦・磚(レンガ)や木簡・墨書土器も出てきています。はつきりとした建物の跡は確認されていませんが、昭和十年代にこの台地が削平された際に多くの大石が動かされたと伝えられていますので、礎石を用いた瓦葺建物が建っていたと推測できます。発掘当初



アクセス

- 1 那珂八幡宮(那珂八幡古墳)**
▶ 福岡市博多区那珂1丁目44
[JR 鹿児島本線]「竹下駅」下車、徒歩約10分。
- 2 アサヒビール工場**
▶ 福岡市博多区竹下3丁目1-1
[JR 鹿児島本線]「竹下駅」下車、徒歩約5分。



1 弥生時代終末期～古墳時代前期前半（3世紀前後）の道路
 2 「筑紫道記」博多部分。9月20日に太宰府から博多まで移動している
 3 昭和14年撮影の空中写真に見える高畑遺跡一帯。台地に切り通しが見える
 4 高畑遺跡出土の絵馬。8世紀前半～10世紀頃の間に使用された大溝から出土（第17次調査）。あわせて天長年間（824～833年）の日付を記した木簡も見つかった
 5 那珂八幡宮。少し離れてみるときれいな丘状になっているのがわかる

● 中世の旅行と道路事情

中世の那珂地域の交通については、現存する史料が乏しいこともあり、詳しいことはよく分かっていません。しかし、古代からの交通ルートがすっかり変わってしまうとは考えにくく、中世でも古代の道路の一部が、その性格を変えながら利用され続けていたと推測されます。

連歌師である宗祇の紀行文として著名な『筑紫道記』は、文明十二（一四八〇）年に山口から太宰府や博多をめぐる三六日間の記録です。

は寺院跡と考えられ、高畑廃寺と呼ばれていましたが、駅路の調査が進んだ近年では、駅家とする説が有力です。その場合は『延喜式』に記載される久尔駅と考えられます。

なお発掘調査によると、東西のルートはともに八世紀後半から九世紀頃に変更が加えられたようです。特に西門ルートは一部使われなくなった可能性があります（太宰府条坊跡第九次調査）。この頃は外交の転換期にあたるため、駅路再編の背景には鴻臚館の役割の変化や博多の発展が指摘されています。一方の東門ルートは再工事ののちに利用されましたが、十二世紀になると管理されなくなりました。十三世紀には水田化する場所も現れました（井相田C遺跡）。太宰府政庁が荒廃するこの頃、道路も公の役目を終えたのでしょうか。

特集 那珂 — 往来を見続ける街 —



Special Feature

が、これには断片的ながら宗祇の旅の行程ルートが記されています。

山口から北九州の若松に上陸した宗祇は、木屋瀬（北九州市）や長尾（飯塚市）を経由して太宰府に到着します。その後、太宰府から博多へと向かいますが、この時に利用したのが古代に整備されていたルートであったようです。

この道中で、宗祇は水城跡や苅萱関を通ったと記述しています。苅萱関は、菅原道真の和歌にも詠まれた古代からの関所ですが、この時期には大内氏の管理下に置かれていました。

関所が置かれているということは、そこが道路として機能していたことを示しています。公の役割を終えても、古代の道路が利用され続けていたことがうかがえます。

● 移転した御茶屋の謎

江戸期の絵図を見ると、福岡から博多を経て那珂を通り、筑前六宿街道の宿場である山家・原田へ至る道が主要な道として描かれています。この道は、途中雑餉隈を通り太宰府へも分岐しています。

そのほぼ中間地点にあたる板付には、寛永六（一六二九）年に御茶屋が建てられました（『筑前国続風土記拾遺』）。御茶屋は領内各所に建てられ、藩主の別館として機能していました。

板付の御茶屋には、二代藩主黒田忠之が島原の乱に出陣した帰路で一泊しており（『黒田続家譜』）、他にも三代光之と五代宣政が宿泊しています（『黒田新続家譜』）。このように主要な道の途中に設置された板付の御茶屋ですが、正徳六（一七一六）年に解体されてしまいます。いったんは再建されますが、明和三（一七六六）年にはついに三宅へ移転してしまいます。これはなぜでしょうか。

それは『筑前国続風土記』の雑餉隈の項にある「町の北のはしに西へゆく道あり。是より春日原を通りて、城下薬院口に行、其道近し」との記述に理由がありそうです。

この近道は幕府へ提出された国絵図を見ても描かれていません。そのことから、初めは人の往来はあっても小さな道であったと考えられます。しかし近道であるために、江戸時代中期以降、福岡を出て薬院・三宅を通り雑餉隈へ抜ける人が板付を通る人よりも多く、やがて藩主も通行するようになり、

ひとくちコラム

どっさり祝って百余年 ～那珂の提灯とぼし～



▲写真1

神社の拝殿に額付きの大絵馬が飾られているのはよく見かけますが、欄間や天井に所狭しと掛けられた、こんな光景は珍しいのではないのでしょうか（写真1）。那珂の氏神、那珂八幡宮です。

これらの絵馬は、那珂八幡宮の氏子のうち、奥と呼ばれる地域の子もたち（男児）によって奉納されたものです。大晦日の早朝、子どもたちは、版木で刷った馬の絵と大根に松竹梅の枝を挿したものをたずさえて、那珂と東那珂の一部、約300軒の民家を回ります。「どっさり祝いなさい」「やまのごと祝いなさい」掛け声を聞いて戸口を開けた家の人は、子どもたちにお祝儀を渡し、受け取った馬の絵と供物を神棚などに飾ります。子どもたちがすべての家を回り終えると、那珂八幡宮に大絵馬が奉納されます。

このような行事は、かつては博多区の南西部を中心に広い範囲で行われていましたが、昭和40年代以降、ほとんどの地域で衰退し、現在では稀になりました。那珂の場合は明治半ばからの子どもの奉納絵馬が残されていることから、少なくとも100年以上はこの行事が受け継がれていることがわかり、拝殿の絵馬群はその足跡を示すものでもあります。

また、古い絵馬には吉村百耕など博多の絵馬師の名も見られます。かつては子どもたちが絵馬を買うため、博多まで出かけていたのでしょう。



▲写真2

かつてはリヤカーを引いて地域を回っていた（1998年撮影）



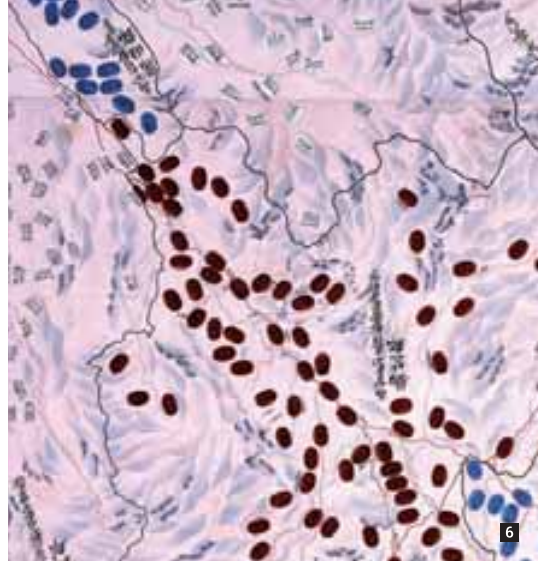
8



9



7



6

6 御国絵図 (元禄14年)。主要な道は赤で引かれているが、薬院・三宅を通る道は描かれていない
7 昭和の那珂の町並。奥にはレンガ造りのアサヒビール工場が見える
8 昭和30年代の竹下駅前
9 福岡都市高速道路の立花寺ジャンクション付近

結果福岡から雑餉隈へ向かう中間にある三宅に御茶屋が移ったと考えられます。

● 鉄道と道路・交通の発達

明治期の地図では、博多から那珂・板付を通り太宰府方面へ行く道と、福岡から薬院・三宅を通り井尻から雑餉隈へ抜ける道が、どちらも主要道路として利用されています。しかし、近代に入ってから大きな変化は鉄道の敷設でした。

明治二十二年(一八八九)年、博多駅と久留米駅を結ぶ鉄道が敷設され、その翌年に雑餉隈駅(現・JR九州南福岡駅)が開業、大正一(一九一三)年には竹下駅が開業します。また大正十三年には井尻から雑餉隈に抜ける道に並走して現在の西鉄天神大牟田線が敷設。両鉄道沿線の竹下や雑餉隈には工場が建設され、次第に市街化が進みました。

一方で、大正期以降の福岡都市圏拡大によって、住吉・竹下・井尻間の道路(現・県道五七五号線)などが整備され、昭和三十年頃になると鉄道と主要道路の周辺に、中小の企業や工場が多く建ち並びます。さらに都市部に近いことから住宅地としても発展しました。

福岡都市高速道路の開通や国道三号の整備など、那珂は今なお交通の要衝です。そして人々の往来を見続けています。

山笠は電線によって低くなった

明治四(一八七二)年の一番山笠(中魚町の高さ)は、五〇尺(約一五メートル)あり、ほかの流れも同様に飾りが華やかで大規模で、破産者が出るほど多額の費用を要した。そこで県は五年に山笠などの作り物を伴う祭祀を禁止したところ、それを待っていたかのように、六年に大名町に開局した福岡電信分局が市内に電信線を架した。十六年の山笠再開後は費用節約のためにも、電信線の下を昇くためにも、高さを半分近くの二八尺(約八・四メートル)にした。それでも通過の際は電信住世話人が、山笠の上部を両方に開くようにしていた。二十五年に電信線が高架になると高さは三一・五尺(約九・五メートル)になるが、三十年に東中洲にできた博多電燈会社が電燈線を架設すると、いよいよ山笠は昇きにくくなり、当番町会議は紛糾して、この年は昇き山はつくらなかった。翌三十一年には電話線が架設され、翌年に同じ東中洲に福岡電話局が開局し、博多の空は電信線、電燈線、電話線が蜘蛛の巣の如く張り巡らされた。山笠廃止論をおさえるためにも、博多の伝統継承のため、街の活性化のため、そして警察署の許可を得るためにも山笠は低くならざるをえず、三十一年の高さは台ともわずかに九尺(約二・七メートル)になった。なかには低い山笠に反発して高く飾りつけ、昇くときに上部を小屋に残していく方式にした町もあったが、三十八年には一尺(約三・三メートル)に統一された。四十三年に福博電気軌道の電車の架線がひかれたときは、ほとんど台のみの状態だった。このように山笠は経費および文明の利器という障害物を、高さを変えてのりこえてきた。なお市内電車が全廃されたのは昭和五十四(一九七九)年、電線の地中化工事がはじまったのは六十一年のことである。ちなみに現在の昇き山の高さは約四・五メートル、飾り山は約一〇メートルである。



▲石堂流(現・恵比須流)
明治25年はこんなに高い山笠を昇っていた

歴・史・万・華・鏡

テキスト・田鍋隆男

● 新刊の販売が開始されました



資料編 近現代1 維新見聞記

【A5判 上製本(函入り) 920頁】
頒価 5,000円

幕末から明治初期に加瀬元将が見聞した出来事を書き留めた「維新雑誌」の全文を収録(一部欠本)。贋札事件、佐賀の乱、竹槍一揆など福岡の重大事件から、幕末の政局、明治新政府の法令、東京横浜の新聞記事まで、明治維新の福岡を全国的な動向を含め知ることができ一冊。



民俗編一 春夏秋冬・起居往来

【A5判 上製本(函入り) 1,000頁】
頒価 5,000円

第一部「春夏秋冬」では市内の祭礼と年中行事を取り上げる。祭礼は市内を網羅。年中行事は人々が一年をどのように暮らしてきたかを記録する。第二部「起居往来」では博多・福岡の寺社、石碑等を一覧化し、これらが町の歴史をどのように物語るかについて記録する。町の記憶を浮かび上げさせ、市民生活をより深く理解するための基礎資料。

『新修 福岡市史 資料編 近現代1 維新見聞記』刊行記念シンポジウム

● 「福岡発・明治維新へのまなざし〜『維新雑誌』とその時代〜」を開催します

今年刊行の「資料編 近現代1 維新見聞記」では、幕末維新を生きた福岡商人・加瀬元将が見聞き書き留めた「維新雑誌」を、一部欠本を除き全編翻刻し収録しました。「維新雑誌」は1863(文久3)年の巻ノ一から1878(明治11)年の巻ノ二十三まで、全21巻からなる貴重な記録です。その内容は幕末から明治初期のあらゆる事件、出来事について、特に福岡の重大事件については詳細に書かれており、同時期の福岡を知るための重要な史料です。今回はこの「維新雑誌」と、それが書かれた時代背景や史料の意義などについて解説する講演とシンポジウムを開催します。

日時 平成24年9月1日(土)
13:30~16:30(開場 13:00)

会場 福岡市博物館 1階
講座室1 (福岡市早良区百道浜3-1-1)
入場無料・事前申し込み不要/定員先着150名

- 内容**
- 【報告】
 - 日比野 利信(北九州市立自然史・歴史博物館) / 『維新雑誌』と福岡の明治維新
 - 高山 英朗(福岡市博物館) / 『著者加瀬元将の肖像』
 - 守友 隆(北九州市立自然史・歴史博物館) / 『幕末の戦争と風聞〜『維新雑誌』の情報史的位〜』
 - 【記念講演】
 - 飯塚 一幸(大阪大学大学院教授) / 『『維新雑誌』の可能性』
 - 【討論】
 - 有馬 学(福岡市博物館長, 福岡市史編集委員会委員長)
 - 飯塚 一幸 ● 高山 英朗 ● 守友 隆 ● 日比野利信(司会)
- ※都合により、演題・報告者は変更になる場合があります。

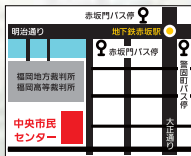


▲ 加瀬元将

● 第8回福岡市史講演会「15・16世紀の博多と東アジア」を開催します

日時 平成24年10月6日(土) 13:30~16:30(開場 13:00)

会場 福岡市中央市民センター 3階 ホール
福岡市中央区赤坂 2-5-8
TEL 092-714-5521
【地下鉄】 空港線「赤坂駅」下車
【バス】 明治通り赤坂門バス停下車
国体道路警固町バス停下車



講師と演題

『大内氏と博多』

伊藤 幸司 (いとう こうじ)
山口県立大学准教授

1970年岐阜県生まれ。2000年九州大学大学院博士後期課程修了。日本学術振興会特別研究員を経て、現職。著作に『中世日本の外交と禅宗』(吉川弘文館, 2002年)、共著に『中世都市・博多を掘る』(海鳥社, 2008年)がある。



『豊臣秀吉と博多』

中野 等 (なかの ひとし)
九州大学大学院教授

1958年福岡県生まれ。1985年九州大学大学院博士後期課程中退。柳川古文書館学芸員を経て、現職。著作に『戦争の日本史(16) 文禄・慶長の役』(吉川弘文館, 2008年)、『秀吉の軍令と大陸侵攻』(吉川弘文館, 2006年)がある。



▶ 入場無料・事前申し込みが必要です(定員480名)

申し込み方法

往復はがき(1枚で2名まで申し込み可)に下記の必要事項をご記入の上、ご応募ください。

▶ 平成24年9月24日(月) 必着

- ① 往復はがきに、氏名・住所・電話番号
(2名申し込みは、全員の氏名と代表者の住所・電話番号)
- ② 返信はがきの宛先に、申し込み者(2名申し込みは代表者)の郵便番号・住所・氏名

※9月24日以降に入場整理券を発送します。応募者多数の場合は、抽選の上、結果をお知らせします。講演会当日は、必ず入場整理券をお持ちください。

申し込み・問い合わせ先

福岡市博物館 市史編さん室
〒814-0001
福岡市早良区百道浜3丁目1-1
TEL 092-845-5245

考 古

人は、営みを始めた昔から、環境に手を加えることによって、住環境を整えてきました。そして現代、福岡市は時代のニーズに応え、団地・工場・ショッピングセンターなどを新設するたため、海を埋め立て、山を削り、大規模に空間を活用し、今ある姿となったのです。では、五〇年前、一〇〇年前、海や山は、鉄道路線はどのような姿をしていたのでしょうか。

平成二十五年刊行の『特別編 自然と遺跡からみた福岡の歴史』では、福岡市の誕生以降、現在の姿になるまでのさまざまな変化をビジュアルで紹介します。

古 代

最近、志麻(志摩)地域(福岡市西区と糸島市の一部)に関する新発見が続きました。ひとつは西区の元岡古墳群G六号墳で見つかった「庚寅(五七〇年)銘の大刀、もうひとつは太宰府市の国分松本遺跡出土の戸籍関係木簡です。大刀については、作成者やその意図・伝来を探ることが、この地域の有力豪族の姿を知る手がかりになりそうです。また木簡は、七世紀末頃に人々がどのように把握されていたかを具体的に考える際の貴重な資料となります。いずれも福岡市西部の歴史をひもとく重要な新資料であるため、早速発掘調査地点を訪れ、木簡については、太宰府市教育委員会のご厚意で現物による积読も行いました。『資料編 古代』にはこのよ

うな新資料も盛り込んでいきます。

中 世

平成二十六年刊行の『資料編 中世2』のための史料収集も一段落し、より実践的な編集作業に取りかかっています。

一冊に収録できる古文書は、ページ数の制限もあり数が限られています。そのため、史料の収録予定数をあらかじめ決めておくのですが、一口に古文書といってもその性格は実に多様です。長さにしてもほんの二行程度のものから、数ページに及ぶ長大なものまで様々であり、予想していた収録数やページ数では収まらないことも珍しくありません。それらの史料をバランス良く収録するために、ページ数と史料数との間で格闘する毎日です。

近 世

『資料編 近世2』では、家臣関係の資料を掲載予定であり、掲載候補はほぼ固まりつつあります。

前回、一口に家臣関係の資料といっても多種多様であるといいましたが、今回の資料編では大きな柱として私的・生活史的内容を含む資料を中心に編集を進めるとの方針のもと、各家臣の家や生活が見える資料がたくさん候補に挙がっています。

これまでは職務や制度といった公的な部分での記述が大半を占めていたかと思いますが、『資料編 近世2』では福岡に住む武士のこれまであまり見えてこなかった生活や私的な一面を描き出せることと思えます。

近 現 代

近現代専門部会は、続刊である『特別編 福岡―築城から現代まで―』(平成二十五年)、『資料編 近現代2』(平成二十七年)、『特別編 近代福岡の文化とメディア(仮)』(平成二十八年)の編集に取りかかっています。

『資料編 近現代2』は時期設定を市制施行前後として、福岡市の成り立ちをめぐる資料を取り上げることが計画されています。市制施行時の課題について、経済・社会・文化的側面を視野に入れつつ、資料の収集と検討を行います。またその他にも時代にとらわれない重要なテーマについては別途構成することも検討しています。

民 俗

平成二十七年刊行の『民俗編2』の構成について検討を始めました。「ひとと人々」と題したこの巻は、文字通り、福岡に生きる個人・集団(または地域)への聞き書きなどから市民生活を描こうとするもので、平成二十二年に刊行した『特別編 福の民―暮らしのなかに技がある』の続編または本編にあたり、民俗編の核ともいえる巻です。

この巻の執筆に向けて、これまでも民俗専門部会の委員で分担しながら、さまざまな年齢・職業・地域の方々に聞き書き調査を行ってきましたが、今年度からは本の内容の具体像を描くため、調査と並行して議論を進めていきます。

先回は旧「福岡市史」の編さんの始動について述べました。昭和31(1956)年6月6日の編さん委員会では、様々なことが決められましたが、最も重要なことは、市制70周年記念事業として、何らかのものを出版するという行政側の強い意思が打ち出されたことです。このことは今回の『新修 福岡市史』編さんへとつながることでもあり、重要な事柄といえます。これで福岡市史の編さんが正式に動き出したのです。

この計画で出版された『福岡市史 第一巻 明治編』を見ると、いくつかの点でこの出版はそれ自体が大変な事業だったと改めて思えます。

特徴的なことを挙げますと、その第1点は外観です。「福岡市史」の中でも最厚の9.5cmで、本文に年表を加えて1,612ページに及び、重量は2.6kg、片手でやっと持ち上げられる実存在感のあるものとなっています。

第2点は内容ですが、とりわけ特徴的な事は、この1冊に時代的には明治初年から末年までを、地域的には旧市域内で、近隣町村合併前の状況が収録されていることです。勿論例外はあります。章立てでは行政、港湾、建設、産業、社会、厚生、文教、消防の各編からなっており、上水道敷設、町村合併、博多港の築造などは大正編に譲った編集となっています。当然ながら記述の面では各事項で濃淡がありますが、これは資料が大戦の空襲などで損なわれているためだとされています。

第3点はその編集期間です。先回に述べたように、編さん委員会が開催されたのは、昭和31年6月です。ここで出版の大綱が示され、作業が始まったのですが、出版は34年の市制施行70周年次となっており、途中で出版期日の延期を話題にしたことがありましたが、幹部委員から軽く一蹴されています。編さん事業自体この時期にあわせることが大命題だったのですから。そうすると年数を考えると3年間ばかりとなります。編さん担当のおのうや小野有耶介はわずか3年で明治年間(1868～1912)を通じた市史編さんが命じられたことになったのです。昭和30年代と今日の出版事情を考えてみてください。この短い編集期間の問題は今日の出版状況と考え合わせるととても大きな問題を抱えていました。当時は手書き原稿から一字一字活字を拾い、活版を作ってから印刷機にかけると手間が要りました。今日のように、各執筆者がパソコンで原稿を活字化して印刷所に渡す形式ではありません。勿論デザインとか組版上の手間は今も昔も変わらないでしょうが、他人に正確に活字化してもらうために、きちんと原稿用紙に向かわねばならなかったことはもう過去のこととなっています。さらに原稿締め切り期限や初校の簡便さなどもあります。我々はいかに利便性の高い時代にいることか、先人の労苦をつくづく思い知らされます。

次に編さん体制と資料の件がありますが、紙数が尽きたようです。次回に報告します。

資料所蔵

- 市史編さん室【表紙/P3:写真⑤/P4:写真1/P5:写真⑥/あとがき】
- 福岡市博物館【P5:写真⑥、歴史万華鏡(石堂流)/P6:「肖像 加瀬元将」、背景「ジョルジオ 中国図の部分 1584年】

転載

- 「福岡市埋蔵文化財調査報告書第676集 外環状道路関係埋蔵文化財調査報告書11高畑遺跡17次」より【P3:写真④】

資料寄託

- 福岡市博物館【P3:写真②】

写真提供

- 久住猛雄作図、西澤千恵里加工図を基に加工【P3:写真①】
- 国土地理院【P3:写真③】 ● 松村利規【P4:写真2】
- 那珂公民館【P5:写真⑦,⑧】

(敬称略)

あとがき 那珂の変わった守り神



今回取材で訪れた那珂公民館では、お忙しい中さまざまなお話を伺ったり資料を見せていただくなど、大変お世話になりました。そんな中、われわれ取材班の目を釘付けにした風景がありました。それは座高1m50cmほどある南国風のライオン像が、小学校がよく見えるデッキにどんと鎮座していたのです。特集ページの右肩からこちらを見つめる写真がそれです。そこにたたく姿は一見するととても奇妙…。館長さんに何うと、像は2005年に東区アイランドシティで開催された「アイランド花どんたく」で会場に飾られていたものなのだそうです。担当課に確認すると彼はバリ島からやって来た像だということが分かりました。さらに調べてみると、現地ではこのようなライオン像は「シンハ」や「シン」と呼ばれ、狒犬のように2体1対の守り神として家の前などに置くのだそうです。花どんたくでは「アジアタウン」入口に設置され、来場者を迎えていました。そして会期終了後に那珂小学校へ寄贈され、最終的にこうして那珂公民館にたどり着いたというわけです。南の島の守り神は、今では那珂校区のちょっと変わった守り神となって、地域の人びとと共に毎日子どもたちの成長を見続けているのです。